

小規模校の強みを活かした起業家教育を軸に 自己肯定感とコミュニケーション力を育む

内子高校 小田分校 (愛媛・県立)

学校存続をかけて魅力的な学校づくりを行っていかうと、
地域と共に起業家教育やプロジェクト学習を推進している内子高校小田分校。
そのなかで生徒たちは、のびのびと自分なりの成長を遂げています。

取材・文／藤崎雅子

実践のKeyword

- 🔍 起業家教育
- 🔍 地域との協働
- 🔍 総合的な探究の時間
- 🔍 学校設定教科
- 🔍 学校存続をかけた魅力化
- 🔍 生徒の全国募集

学校存続をかけた 地域社会を担う人材育成

愛媛県の山間にあり、豊かな自然に囲まれた内子高校小田分校。1948年に小田高校として開校して以来、地域の子どもたちの学校として親しまれてきたが、近年は少子化により生徒が減少し、2020年度に分校化された。現在の全生徒数は59人で、22年度生徒募集の結果によっては廃校の決断が下されるといふ。

強い危機感をもって学校存続を目指す同校は、17年度より校内に設置した魅力化推進室を中心とし、地域と連携しながら新しいカリキュラムづくりに取り組んできた。20年度からは生徒の全国募集も始めた。

そこで同校が大切にしているのは、「学校で面白い」と思える環境の下で生徒一人ひとりを成長させること。学校存続はその結果としていくるとの考えだ。

同校の生徒について、「驚くほど素直」「優しい」と教員は口を揃える。一方で、自己肯定感の低さやコミュニケーションへの苦手意識などの課題感も聞かえてくる。同校が目標に掲げているのは、そんな生徒を「地域社会を担う人材」として育成することだ。魅力化推進室長・山本健先生はこう語る。

「本校の生徒が苦手とする、自分の考えを伝えることや自ら行動することこそ、これからの社会では重要です。経験不足で慣れていないだけの生徒も多いので、自分で考えて行動するプロセスを学校が工

夫して提供し、自信をもたせて社会に送り出したいと考えています」

生徒それぞれの歩みを肯定し 起業家精神や資質・能力を育む

社会で求められる力の育成の具体策として、17年度以降、地域との連携の下で2つのプログラムをスタートさせた。

その一つは、1〜3学年の総合的な探究の時間を中心に実施する「起業家教育プログラム」だ。プログラムのテーマは「ふるさと小田―未来への創生―」。学校のある小田地区をフィールドとして展開し、地域の魅力や課題を発見して解決策のプランニングに取り組み。ねらいは起業家の輩出ではなく、起業家精神や起業家的資質・能力の育成にある(図1)。

「探究心をもって新しいことの創造にチャレンジできる起業家精神や、情報を収集・分析して実行する力などの起業家的資質・能力は、どのような仕事にも必要。将来起業するかどうかにかかわらず育んでほしい」(山本先生)

1学年ではまず地域を知ることに関点を置き、フィールドワークや地域との交流を行う。2学年では、地域の重要な産業である林業を軸とした地域活性化の検討を通じ、地域連携による探究のプロセスを学ぶ。3学年では、地域活性化に関する課題の発見から生徒自身で行う。地域のさまざまな大人にアドバイスをもらいながら、解決策の立案にグループで取り組み、日本政策金融公庫の高校生ビジネスプラン・グランプリに挑戦するこ



School Data

1948年設立／普通科
 生徒数59人(男子32人・女子27人)
 進路状況(2021年3月卒業生)
 大学5人・短大2人・専門学校7人・
 就職13人
 愛媛県喜多郡内子町寺村978番地
 TEL | 0892-52-2042

Outline

1948年に小田高校として開校。地域の過疎化・少子化の影響を受けて生徒数が減少し、2020年度に内子高校の分校となる。22年度の入学者が31人を下回ると次年度以降は募集停止となる。学校存続の危機に際し、17年度より校内に魅力化推進室を設置して地域に開かれた特色ある学校づくりを推進しており、20年度より全国から生徒募集をしている。



教育魅力化コーディネーター(内子町地域おこし協力隊)
 小田原希実さん

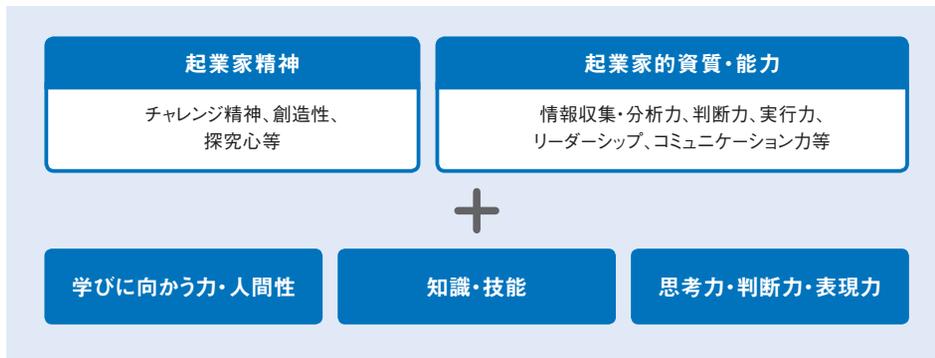


第3学年担任
 柴田奈緒先生



魅力化推進室長
 山本 健先生

図1 起業家教育プログラムで育成を目指す力



とをゴールとしている(図2)。
 学年が進むにつれて活動の主体が生徒に移っていき、3年生になると教員はほぼ見守るだけになるといえる。そのプロセスに関わる教員が心掛けているのは、生徒を肯定的に受け止めることだ。
 「生徒が一生懸命考えて出した意見は否定せず、まず生徒の話を徹底的に聞く。そのうえで、次に何が必要かを一緒に考えていきます」(山本先生)

図2 起業家教育プログラムの概要

プログラムテーマ「ふるさと小田ー未来への創生ー」			
学年	1学年	2学年	3学年
テーマ	内子町小田の産業・文化に学ぶ	森林資源を中心とした地域産業の活性化を考える	地域デザインのプランニングへの挑戦
取組内容	地域に目を向け、その魅力を発見することにより、郷土に誇りをもち、これからのグローバル社会を生き抜く力の基礎を養う。また、ロールモデルとなる地域の方や社会で働く方とのよい出会いを通して、生き方を学び、自分の生き方を考えるきっかけとする。	町の約8割を占める森林と人との関わりをさまざまな観点から考えることにより、郷土愛を醸成するとともに、地域の産業や自治体の取組について学び、地域の未来について考えることで、主体的に行動する姿勢や具体的な問題解決能力を身につける。	答えの用意されていない課題を、自分たちで見出し解決していくことを体験する。課題解決の過程で、疑問をもち考え抜く力や、多様な人々と共に、目標に向けて協力する力等を育成する。地域の自然や歴史文化等の地域資源を見直し、地域活性化に携わる者の一人であるとの自覚をもつことにより、将来、地域創生に貢献できる人材の育成を目指す。
活動例	幼稚園児交流／ 企業フィールドワーク	発電所・森林フィールドワーク／ 地域住民との意見交換	課題ジャンゴ化／ 地域とのアイデア会議／ 地域デザインプラン企画・ コンテスト
	企業との協働によるキャリア教育／海外企業から学ぶ		
	小田校生全校会議「オダカン」／全国の大学生との協働によるキャリア教育		

に考えていきます」(山本先生)
 「前回よりうまくいったことや、その子の良さが発揮されたことを、言葉に出して褒めるようにしています。生徒の動きを肯定することで、どんどん次の行動へと後押ししていきたい」(3学年担任・柴田奈緒先生)
 教員に背中を押され、それまでの自分では考えられなかったチャレンジをする生徒も。最近では、学校が設定するゴールであるプランの提案にとどまらず、それを実行に移す例も出てきている。
 「昨年度、小田の名物うどんによる地域活性化を考えたグループは、地域の方に提供していただいた車でキッチンカーを製作し、県内外のイベントに出店して名物うどんをPRしました。困難もあるが地域の方の協力によって自分たちの思



オダカンで出たアイデアから生まれた「屋上ランチ」を全校で楽しんだ。



「オダカン」では異学年グループで学校をテーマに意見を出し合う。



内子町の自然のシンボルである小田深山でフィールドワーク。

「自分が形になり、良い経験になったよかったです」（教育魅力化コーディネーター・小田原希さん）

生徒全員で学校について議論。出たアイデアを実現

起業家教育プログラムのなかには、全学年が一緒に行く、小規模校の良さを活かした活動もある。その代表例が、全校生徒で自分たちの学校について話し合う「オダカン」（小田校カンファレンス）だ。発想法やディスカッション方法などを外部講師から学んだあと、学校に関するテーマについてグループディスカッションを行い、アイデアをコンテスト形式で競う。

「自分の意見を出すことに慣れない生徒も、学校のことなら話しやすいのではないかと考えました。素晴らしいアイデアを出すことより、それぞれが自分なりに考え、意見を言い合えることに重点を置いています」（山本先生）

ディスカッションは8人程度の学年横断グループで行う。1年生は発言ができない生徒も多いが、先輩たちの様子から自分たちが目指す姿勢や行動を学ぶ。2年生では、自分の意見やアイデアを出せる生徒もぐっと増える。3年生になると、自分の意見を言うだけでなく、どうすれば先輩たちが発言しやすくなるかも考えながら、グループの意見をまとめていく。実施後は「先輩・後輩で話せて楽しかった」「自分の意見を聞いてもらえてうれしかった」などの感想が上がり、人気がある学校行事の一つとなっている。

昨年度、「真剣に考えても実現しない」とやる気が出ない」との生徒の意見が基となり、グランプリに選ばれたアイデアの実現化を学校側が約束。「小田分校PRのためのゆるキャラコンテスト」や、普段は閉鎖している屋上で教職員と生徒が集まって行う「屋上ランチ」などを学校が許可し、生徒主導で実施した。

「学校は本当にやってくれるんだ」。今年度は、さらに熱が入った。生徒によるオダカン委員会が考えたテーマ「入学者を増やすには」について、自分たちの学校を自分たちで守ろうと意見を交わした。

「今年度は入賞のみに限定せず、挙げたアイデアはどれも可能な限り実現させたいと考えています」（山本先生）

課題解決の実行まで行う個人プロジェクト

次に、起業家教育プログラムと並ぶ特徴的なプログラムである、学校設定教科「探究」についても見ていこう。同校は2学年からビジネス・グローバル・アカデミアの3つの類型に分かれるが、「探究」は、ビジネス類型とグローバル類型の2・3学年のカリキュラムに組み込まれている（図3）。

「探究」には4つの科目があり、卒業後に地元で働く生徒が多いビジネス類型では、「ふるさと探訪学」と「ふるさと創生学」の2科目を履修。地歴公民科の学習内容を総合的に活用しながら、フィールドワークを通じて地域を深く学んでいく。

また、探究学習に力を入れるグローバル類型では、「ふるさと探訪学」に加え、

「プロジェクト学習Ⅰ・Ⅱ」にも取り組む。プロジェクト学習は起業家教育プログラムと同様に地域の課題解決を通じて幅広い力を磨くことをねらいとしているが、グループではなく個人プロジェクトを基本としていること、そして全員が解決策の実践までを目指す点が特徴だ。

生徒にとって、課題の発見から解決策の実践まで自分で行う個人プロジェクトは、簡単ではない。困難にぶつかったり、方向性を見失ったりしたら教員に相談し、アドバイザーやサポートをもらいながら進める。引っ込み思案で地域の方への依頼に二の足を踏む生徒には、最初は教員と一緒に原稿を考え、電話掛けにも付き添う。

「そうしたなかで生徒は徐々に教員の手を離れ、自分で考え、外部の方ともやりとりしながら活動するようになっていきます」（小田原さん）

これまで地域の伝統的な祭りの復活や、道の駅との協働による地元の果物を使った「おだものゼリー」の開発・販売、「学校HP閲覧者数1日1000人」を目標に取り組んだ学校PRなど、さまざまなプロジェクトが実施された。

「自分のプロジェクトでは誰もが主役になり、地域の方が協力してくださって自分の考えが形になります。それが自信や意欲につながっていると感じます」（小田原さん）

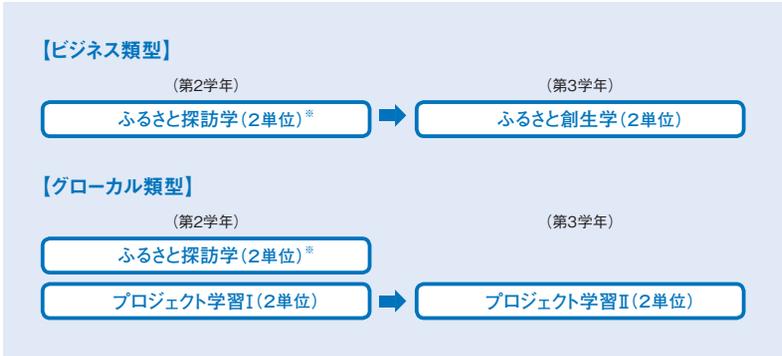
地域にとっても学校存続は悲願であり、同校の活動に非常に協力的だ。その関係性を活かし、来年以降はグローバル類型以外も含めて「一人一プロジェクト」

を可能にしていきたいという。

醸成された興味・関心を広い視野をもって進路に接続

では、こうした起業家教育プログラムや「探究」で培った力や興味・関心は、進路選択にどうつながっていくだろうか。引っ込み思案だったある生徒はプロジェクト学習で「見える世界が変わった。もっと世界を広げたい」と、国際協力で興味をもつようになり、進路目標を大学の国際関係学部進学に絞り込んで熱心に受験勉強に取り組んでいる。また、チームや後輩

図3 学校設定教科「探究」の構成



※ふるさと探訪学はビジネス類型・グローバル類型同時開講



プロジェクト学習I受講者は小田分校の知名度を上げるため、口コミ、ポスター、SNSを活用して学校HPの閲覧を促進した。

プロジェクト学習IIでは、コロナ禍で中止になった「灯籠まつり」の小規模開催に3年生2人が取り組んだ。



「COLLABORATIVE SEMINAR」では、全国の大学生・大学院生とオンラインでディスカッションを行った。

との「コミュニケーション」のなかで「自分の良さは人の話を聞けること」と気づき、それを活かして教員を目指すようになった生徒もいる。それぞれの得意や興味・関心を基にした進路選択が目立つ。

また、地域課題に取り組んだ経験から、将来も地域に関わっていきたいと考える生徒が増えている。その意欲は喜ばしいことだが、大学進学希望の場合、志望先が地元国立大学の地域創生に関する学部集中する傾向がある。小田原さんは同校着任時、その点に違和感をもったという。

「どの学部でも、学んだ学問を使った地域貢献の仕方があるはず」。そこで今年度、大学生と対話する全校生徒対象のキャリア

教育セミナー「COLLABORATIVE SEMINAR」を立ち上げた。全国各地で多様な学問分野を学んでいる12人の大学生・大学院生と、同校をオンラインで接続。生徒はグループに分かれてそれぞれの学生の学問分野についてレクチャーを受け、その学問が地域の活性化にどのようにつながる可能性があるかなどを話し合った。例えば、建築学を専攻している学生とは、地域で盛んな林業と建築学を組み合わせると何ができそうかを話題にディスカッションした。

「世の中にはいろんな学問がある。もっと自分の得意なことを活かせる学問があるかもしれない。全国各地の多様な学問を学んでいる先輩たちとの対話を参考に、生徒たちにもっと広い視野をもつて将来の可能性を広げてほしいと考えています」(小田原さん)

「学校が好き」 受容し合いながら成長

同校への入学者数は20年度に16人まで落ち込んだが、21年度は26人と上向いた。その内訳を見ると町外出身者が数字を引き上げており、全国募集による県外出身者も約4人に1人にまで増加している。

かつて大半を地域の子どもたちが占めていた同校では、急速に多様性が高まり、それが新たな魅力となっている。

「さまざまな考え方や授業姿勢をもつ生徒も入ってきて、お互いに刺激を与え合っていると感じています。『当たり前だと思っていたことは本当にそうなの

か?』と、生徒も教員も改めて見つめ直すきっかけになり、議論につながることもあります」(柴田先生)

生徒の多様化が良い循環を生んでいるのは、同校の受容性の高さゆえだろう。多様な生徒を受け入れ肯定していく教員の姿勢は、生徒の間にも浸透。互いを受容し合う環境の下、生徒は特にコミュニケーション面で大きく成長している。

「入学時は人前で声を出すのが難しい生徒も珍しくありません。しかし、教員の働きかけからお互いの良さを認め合える雰囲気が出ていき、自分の気持ちを伝えられるようになっていきます」(柴田先生)

「自分を出せなかった生徒が一言でも発言できるようになったのも、話すことは

できていた生徒が後輩の話を引き出すことができるようになったのも、どちらも素晴らしいこと。自分なり成長の形を見せてくれるのが嬉しい」(小田原さん)

そんな生徒の成長が教員の誇りだ。学校存続の鍵を握る来年度生徒募集のための活動も山場にさしかかっているが、どの教員も「うちの一番の魅力は生徒」と胸を張る。「消去法ではなく、『この学校で〇〇したい』『〇〇に惹かれて選んだ』など前向きな志望理由が増えてきた」と小田原さんは手応えを感じている。

生徒は口々に「学校が好き」「小田分校の、人が好き」と笑顔で語る。この学びの環境を先輩に引き継いでいくことは、生徒たちの切なる願いでもある。

Interview

温かい人に囲まれた環境で、苦手を克服

私は内子町外の大規模中学校出身です。体験入学で、「この学校は先生が生徒一人ひとりをよく見てくれるのでは」と感じて入学しました。知り合いがほとんどいないことが少し不安でしたが、同級生も先輩も温かく迎え入れてくれました。私は中学までは人前で話すことが得意ではなかったのですが、小田分校では、授業や行事はもちろん、学校PRで中学生や保護者の方と話す機会もあり、そのなかで少しずつ前に出て話せるようになりました。また、地域で学ぶなかで町への関心をもつようになり、高校卒業後は内子町職員として就職する予定です。農業の町なので、もっと若い人が楽しく農業に携わることができるようにしていけたらと思います。

(3年生・中村花楓さん / 写真左)

まず自分から動いてみるのが大切

プロジェクト学習では、コロナの影響で中止となった小田地区伝統の「灯籠まつり」を小規模開催する企画を立てました。みんなでお祭りを盛り上げて小田の明るい雰囲気を取り戻したい、と思ったからです。地域の皆さんに協力していただき、幼稚園や小学校、中学校とも交流しながら「ミニ灯籠まつり」を実現させることができました。この活動で学んだのは、「自分が動いてみないと何も始まらない。まずは動いてみるのが大切なんだ」ということです。私の将来の目標は、世界の支援が必要な国々のための国際協力が広がるような活動を行うこと。高校時代の経験から学んだことを活かして取り組んでいきたいです。

(3年生・松本菜奈さん / 写真右)

